2020 年 2 月 21 日

第 152 号　外国人との共生 ～活躍する 2 代目～

主任研究員　須藤　誠

【要旨】

岐阜県美濃加茂市は、特急列車で岐阜駅から 20 分、名古屋駅から 40 分の岐阜県南部に位置する人口 5 万 7 千人の都市である。人口の 9.3%が外国人で、ブラジル人とフィリピン人がそれぞれ 2 千人以上居住している。地方自治体別の人口比の順位では、ブラジル人が 5 位、フィリピン人は 1 位であり、このような複数国の外国人が多く住む地域は比較的珍しい。

リーマンショック以降、それまで 6 千人居住していた外国人が一時 4 千人を割り込んだが、再び増加に転じ、ピークだった 6 千人に迫る勢いを見せている。外国人にとって美濃加茂市にどのような魅力があるのだろうか。

子供の頃に来日して美濃加茂市で育ち、現在も日本で活躍しているブラジル出身の渡辺マルセロさん、フィリピン出身のダルモ・マイケルさんから話を聞いた。二人にとって子供の頃の日本での暮らしは必ずしも順風満帆とは言えなかったが、学校の先生や地域の人々に救われる場面が多かった。二人は異口同音に「地域に育てられた」「地域に恩返ししたい」と地域への感謝を語っている。

＜目次＞

1.美濃加茂市（岐阜県） 2
2.ブラジルから来日 3
3.フィリピンから来日 5
4.子供の夢を壊さないために 7
【参考】教会について 9

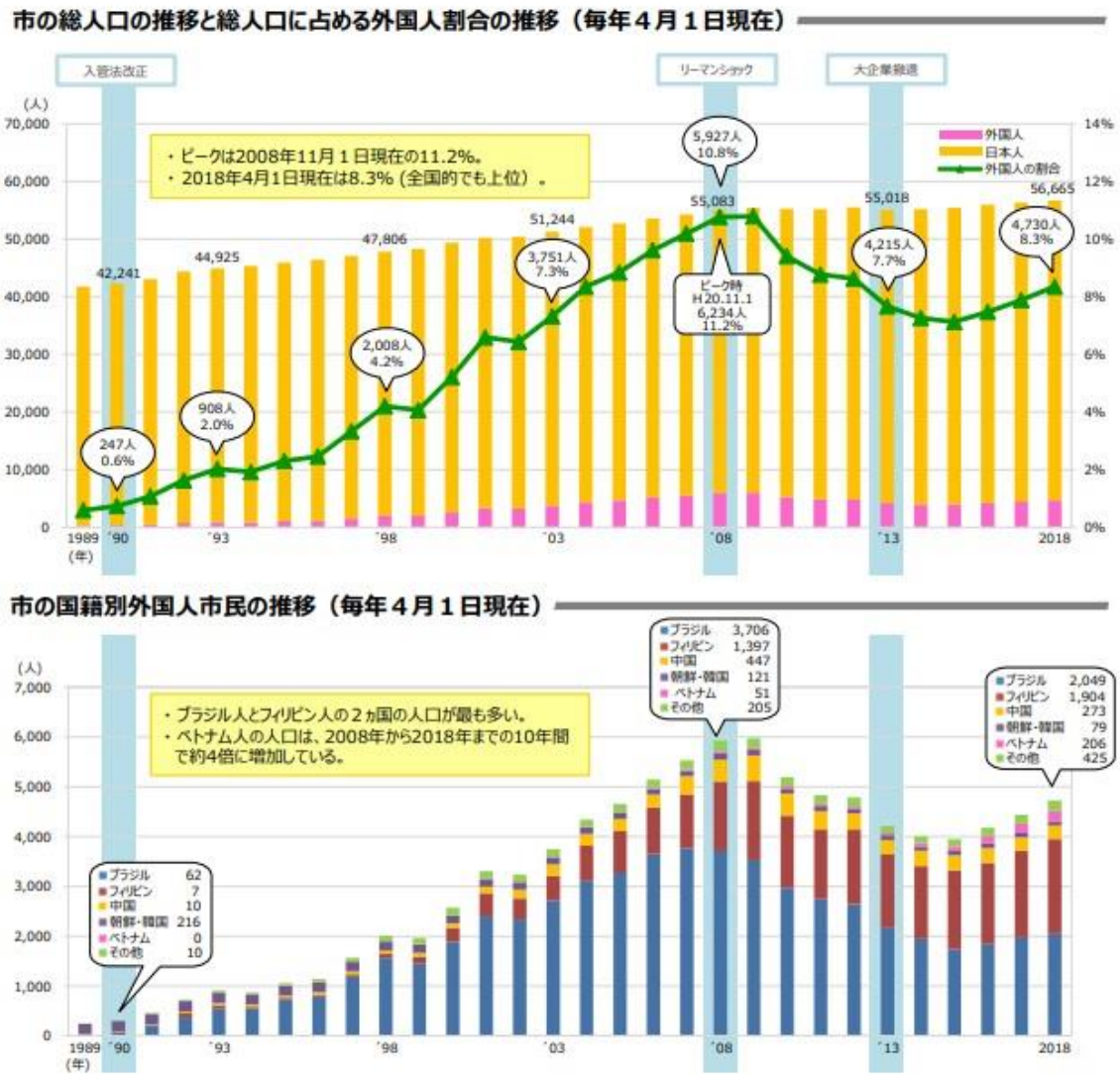
本稿中に記載したデータ・数値等は、筆者が信頼できると判断した各種データに基づき作成・加工したものですが、その正確性・確実性を保証するものではありません。

1. 美濃加茂市（岐阜県）

岐阜県美濃加茂市は、中山道と木曽川とが交わる地域で、江戸時代は太田宿という宿場町として栄えた。公武合体の象徴として江戸幕府 14 代将軍徳川家茂（いえもち）に降嫁するため江戸に下った和宮親子内親王（かずのみやちかこないしんのう）が、1861 年(文久元年)10 月 27 日に宿泊している。

岐阜県の南部に位置し、特急列車で岐阜駅からの所要時間は 20 分、名古屋駅からは 40 分である。

＜図表 1＞ 美濃加茂市の人口推移



（出所）第 3 次 美濃加茂市多文化共生推進プラン

図表 1 は美濃加茂市の 2018 年までの総人口・外国人人口の推移である。その後、2019 年 4 月、2020 年 1 月時点の総人口は、56,993 人、57,323 人と増加している。外国人は 5,062 人、5,323 人であり、人口比は 8.9%、9.3%となっている。わずかながらではあるが、日本人も増加している。外国人の内訳は、ブラジル人が 2,161 人（人口比 3.8%）、2,204 人（同 3.8%）、フィリピン人が 2,018 人（同 3.5%）、2,117 人（同 3.7%）である[1]。地方自治体別の人口比の順位は、ブラジル人 5 位、フィリピン人 1 位であり、2 か国の外国人が突出して多く住む地域は比較的珍しい。しかもその多くは、日本語学校や転職できない職場と結びついている留学生や技能実習生ではなく、自らの意志で職場を、ひいては居住地を選べる外国人である。

東海地方には職場となる工場が多く立地していることもあり、1990 年の出入国管理法改正以降、まずブラジル人の在留者が増加し、2000 年頃からはフィリピン人の在留者も増え始めた。2000 年代後半には在留外国人がおよそ 6 千人に達した。その内訳は、ブラジル人が 60%以上を占め、フィリピン人は 25%程度であった。2008 年のリーマンショック以降、特に 2013 年に市内にあった大手電機メーカーの工場が閉鎖された影響が大きく、ブラジル人を中心に在留外国人数は減少し 2015 年には 4 千人を割り込んだ。しかしその後、フィリピン人を中心に再び増加に転じ、現在はピーク時の 6 千人に迫る勢いである。その内訳は、ブラジル人とフィリピン人の在留者数が拮抗している。

外国人にとって美濃加茂市にどのような魅力があるのかを探るため、子供の頃に来日して美濃加茂市で育ち、現在も日本で活躍している二人に話を聞いた。

2. ブラジルから来日

渡辺マルセロさんは 1978 年ブラジル・リオデジャネイロ生まれの日系 3 世。現在は行政書士として、多くの外国人の相談に応じている。

渡辺さんは、親戚の数家族とともに 1991 年に 13 歳で来日。日本語はほんの少し分かる程度だった。滞在期間の予定は 2～3 年と聞いていたので、憧れの先進国への旅行気分で暗い気持ちはなかった。父親の仕事の関係で、美濃加茂市内の同じアパートや近所に親戚同士が住む生活が始まる。在留外国人が増えた契機は 1990 年の出入国管理法改正であり、法改正直後のこの当時はまだ日本のどこにも外国人を受け入れる体制は整っていなかった。

地域や学校も戸惑ったことだろう。渡辺さんは中学 1 年生の年齢だったが、2 学期から小学 6 年生に編入された。ブラジル人の同級生はいとこを含め 7 人。日本の生活スタイルに慣れるために教頭による個別授業があり、日本人のクラスメイトも親しく話しかけてくれ、寂しさや疎外感はなかった。苦労したのは給食。ブラジル人にとって、日本の食事は味がしない。甘くない牛乳を飲むのも初めてだった。残すほどではないが、美味しいと感じる

[1] 美濃加茂市ホームページより。2020 年 1 月 1 日時点の人口等。

ことはなかった。日本で生活していくにあたり様々な経験ができ、1 学年下に編入されたことは結果として良かったと振り返っている。なお、現在は学年を繰り下げての編入は行われていない。

進学した中学校はいわゆる「荒れる中学」だった。ブラジルでは上下関係もフランクなため、先輩・後輩の関係に慣れておらず、怖いところに来てしまったと感じた。不良以外は丸坊主の中、髪を切らないブラジル人は不良に目をつけられた。日本語の授業が難しく、つまらない上に不良に絡まれ、嫌気がさして中学 1 年の時に多くのブラジル人同級生が中退し、父親を日本に残して母親と帰国していった。渡辺さんには、担任の先生が熱心に気にかけてくれた。その熱意に応えたいとの思いから、できることは何でもやろうとする参加意識が芽生えていた。後から分かったことだが、担任の先生には、かつてブラジルに移住した日本人・日系人の苦労を日本においてブラジル人・日系人にさせてはならないという思いがあったそうだ。月に 1 回程度日本語教室にも通うようになったが、先生は夫の転勤に伴いブラジルに住んだことのある日本人女性で、日本語に限らず何でも相談できたのがありがたかった。中学 1 年の終わり頃には日常生活での日本語には支障がなくなった。卓球部に所属し、親しい日本人の友人もできてサッカーをしたり互いの家を行き来したりした。中学校生活が楽しくなり、まだブラジルに帰りたくなかった。それまで、いずれブラジルに帰るのだからと勉強についていけなくてもあまり気にしていなかったが、皆と同じように高校に行ってみたいと思うようになった。7 人いたブラジル人同級生のうち、中学を卒業したのは 2 人、高校への進学を目指したのは渡辺さんだけだった。

高校は、当時は公立高校の滑り止めの位置づけだった私立高校に進学した。英語が得意だった渡辺さんに、中学 3 年の時の担任の先生が英語を活かせる推薦入学試験を紹介してくれたため合格できた。サッカー部に入りたかったが、所属することになった進学コースの生徒は部活動が禁止で、勉強漬けの毎日となった。宿題を忘れると正座させられるのだが、正座が苦手だったため徹夜して頑張ることもあった。そのうちに、進学校に行った中学時代の友人よりも模擬試験で良い結果が出るようになり、成果を実感して勉強を頑張り続けた。

英語の教師を目指して、岐阜大学教育学部に進学。しかし、燃え尽き症候群のような虚脱感を覚え、必ずしも英語の先生になりたい訳ではないのではないかとも思い休学し、趣味のビリヤードに打ち込むかたわら、外国人中学生向けの日本語教室を手伝った。知識をぐんぐん吸収していく子供たちの姿が子供の頃の自分と重なり、勉強好きであることを再認識し、改めて勉強がしたい気持ちが覚醒して復学、卒業した。在学中に父親は仕事の都合で帰国している。

初めての就職先は美濃加茂市役所。外国人相談員 兼 通訳として 2 年間勤務した。自分が来日してから 10 年が経過し、市の教育委員会による日本語教室をはじめ、支援は来日当時に比べはるかに充実していた。それにより小中学校における中退者は減少していたが、

進学者が少ないままであることに驚き、外国人の子供たちの学習支援を行うブラジル友の会の活動にも取り組むようになった。この頃、教職を目指すにあたり望ましいと考え、日本人に帰化した。

その後、美濃加茂市内の私立病院に転職。専門職でなく総合職として働いたが、社会についての基礎知識がないことを実感させられた。一般教養を身につけるために勉強しなければと思い、勉強の一つの切り口として行政書士試験に出会う。初めての行政書士試験は不合格だったが、1 年後に 2 度目の受験で合格。世の中には自分の知らないこと、もっと面白いことがあると思うようになり、得意なジャンルの中だけで考えないようになった。

行政書士として独立するために退職。病院は景気と無関係なので気づかなかったが、世間はリーマンショックに見舞われていた。退職の翌日が美濃加茂市定住外国人自立支援センターの開所日で、半日程度手伝うつもりで顔を出したところ、いきなり取材陣に囲まれ、相談電話をひっきりなしに受け、しばらく手伝い続けることになった。ブラジル人はあまり貯蓄をする習慣がないこともあり、電話代や学校の給食代さえ支払えないという事態に陥る人が多かった。相談を受ける中で、問題の解決方法を身につけることができるようになった経験は、現在の仕事にも活かされている。

自立支援センターを 1 年近く手伝った後に、本格的に行政書士として仕事を始めた。主に査証や相続を取り扱っている。美濃加茂市から岐阜市に転居し現在に至る。

3. フィリピンから来日

ダルモ・マイケルさんは 2000 年 3 月フィリピン・マニラ生まれの日系 4 世。現在は大学生で、学業に加えボランティアなど様々な活動に携わっている。

ダルモさんは、3 歳の時に両親だけが日本に渡り、マニラの祖母宅に預けられる。伯父や伯母も日本や韓国などに渡っており、いとこも一緒の生活だった。いとこには兄弟がいたがダルモさんは当時一人っ子だったこともあり、疎外感から心を固く閉ざしていた。

2007 年 7 歳で来日。両親と暮らすようになっても心は閉ざしたままだった。タガログ語など現地語しか分からなかったため、最初に外国人児童初期学習適応指導教室『エスペランサ[2]』（現在の『のぞみ教室』）に通った。当時、美濃加茂市に居住している外国人の大半はブラジル人。『エスペランサ』でもフィリピン人の子供は一人きりだったため、日本語の前にブラジルの公用語であるポルトガル語の基礎を学んだ。住んでいるエリアの都合で通学も一人きりだったが、通学路沿いの日本人のおばさんが毎日声を掛けてくれ、朝顔の種をくれたこともあった。心が氷解していくようだった。1 年生の最後の方から 2 年生の 2 学期までをスキップする形で、小学 2 年生の 3 学期に編入。クラスメイトと話すのが楽しく、日本語能力はどんどん高まった。3 年生の時に田植え体験の遠足で加茂農林高校の生徒

[2] ポルトガル語で「のぞみ（希望）」を表す言葉。

と接する機会があり、人見知りだったダルモさんには明るく親切な人柄がまぶしく、憧れを抱く。これがのちの進学に影響を与える。4 年生の時には給食委員になる。役割を与えられ、他の生徒が着席して待っている中を配膳する特別感や責任感に充実を覚えた。一方で、親が授業参観に来てくれなかったり、運営に親のサポートが必要なスポーツ少年団に参加できなかったり、親の感覚が日本人と異なることを苦痛に感じることもあった。

進学した中学校でも率先して給食配膳ボランティアに取り組み、後に給食委員長に立候補。先生から任命される陰で、前委員長と可愛い女の子が落選していた。ダルモさんは、「外国人のくせに生意気だ」「先生に取り入りエコひいきされている」などのバッシングをクラスメイトから受けるようになる。フィリピン人の中でも、ズボンをさげて履くサゲパンなどの流行に乗らない真面目な言動のために疎まれた。家庭では、他のフィリピン家庭と同様に年長者が絶対で、父親によく叱られた。余計なことをせず、早く帰宅して家の手伝いをしろとも強く言われた。学校も家も居心地が良くなかったため、たまたま広告を見て知ったイベントのボランティアに参加した。取組に充実感がある上に、感謝までされて役に立っている実感が湧き、月に 2 回のペースで取り組むようになった。

高校進学にあたって、父親からは定時制に通いながらアルバイトをするように言われていたが、根気強く説得して憧れの加茂農林高校（全日制）に入学。クラスでは文化祭の責任者になり、生徒会でも書記になるなど当初から積極的に活動した。しかし周囲の生徒からは必ずしも良く思われず、2 年になる際の生徒会選挙では書記に落選する。頑張っても無駄だと思うようになりつつあった時、先生の勧めで美濃加茂市の特産品である干し柿『堂上蜂屋柿[3]』をプロモーションするプロジェクトに関わることになる。ダルモさんは、行うべきことは文化の発信だと考えたが、これまでの議論がいわゆるインスタ映えする演出や SNS による発信など商品 PR 程度の手段にとどまっている現状を知り、俄然闘志に火が着く。干し柿を学ぶために、自分の部屋で干し柿作りを始める。父親は、息子の頑固なまでの頑張りぶりを見て、もう何も言わなくなった。一方ダルモさんも、小学校にしか通ったことがなく 8 歳の時から家族のために働き続けている父親の生き様に思いを馳せられるようになり、互いの生き方を徐々に尊重し合うようになる。

プロジェクトでは、先生と一緒に富山県や宮城県など県外の干し柿農家を回る旅にも出た。それまでほとんど旅行らしい旅行をしたことがなかったため、全てが刺激的だった。百聞は一見に如かずで、考えを巡らせる範囲や考え方の視野も一気に拡がった。それにより、一人よがりでないと自信を持って自分の意見を伝えられるようになり、クラスメイトや父親から何を言われても気にならなくなった。そして何より、先生からの全幅の信頼に応えたいという気持ちがどんどんと大きくなった。ダルモさんが尊敬する、周囲からの人望も厚い先輩からも「一生懸命はカッコいい！」と応援され、生徒会選挙で書記に再び当選する。

---

[3] かつて朝廷や幕府にも献上されていた干し柿の極上品。

プロジェクトでは、フィリピンの伝統的なクリスマス飾りである星形の『パロル』を、地元の産品である柿渋で染めた美濃和紙と竹を使って作成することを考案。ダルモさんの熱意は周囲の人々を動かし、2017 年のクリスマスには 95 個の『パロル』が美濃加茂の夜空を優しい光で灯した。

それらの取組や成果を発表するコンテストなどにも積極的に参加するようになり、高校 2 年の終わり頃には「全国高校生マイプロジェクトアワード 2016」の学校部門に、加茂農林高校のプロジェクト「堂上鉢屋柿 Activation Pro　～美濃加茂市から世界へ発信！！～」で参加。地方大会を突破し全国大会に進み、ベストスピリットアワードと高校生特別賞をダブル受賞する。高校 3 年になると、個人としても参加するようになり、第 21 回ボランティア・スピリット・アワードでは最優秀賞である文部科学大臣賞と日米ボランティア親善大使をダブル受賞した。先生への恩返しができて嬉しかった。

大学進学にあたり、高校から指定校推薦を勧められたが、その大学には魅力を感じなかった。家庭の経済的な事情は理解した上で、魅力を感じる大学に進学するため、教育ローンや給付型奨学金などの制度も含め、自分で色々と調べ上げた。そして、自ら納得して選んだ名古屋市立大学に進学。大学進学後、前年に就任した日米ボランティア親善大使としてワシントン DC を訪問する機会に恵まれ、更なる刺激を受けた。プロジェクトを引き継いだ後輩のサポートをする一方、全国公立大学学生大会『LINKtopos』での発表、『TEDxYouth@Tokyo 2020[4]』への登壇など、積極的な活動を続けている。

4. 子供の夢を壊さないために

二人から話を聞いて感じたことは、地域に育てられたという意識を強く持っていることだ。両親が仕事で不在がちの環境下で、心細い時に正面から向き合ってくれた人、潜在能力に合わせて役割を与えてくれた人、期待を込めて日々の活動を見守ってくれた人、そんな地域の人々にとても感謝していた。そして、異口同音に「恩返し」という言葉を繰り返していた。学校の先生や地域住民の接し方が良かったことが分かる。二人は打てば強く響く人材であったため、込めた期待をはるかに上回る活躍につながってもいる。

一方で、多くの外国人の子供達が、日本で充実感や達成感を得られていない現実もある。彼らにもチャンスはあったと思うが、それを何かの契機にすることが難しかった。その理由として、言葉、社会などの壁に加え、親の壁がある場合も考えられる。日本では勉強が好きでない子供も高校や大学に進学するケースが多いが、ブラジル人やフィリピン人はそうであれば早く働いた方が良いと考えるだろう。これは価値観の違いであり良し悪しでは

[4] TEDx は、世界的講演会「TED Conference」を開催している非営利団体 TED（Technology Entertainment Design）からライセンスを受けたコミュニティ。

ない。問題となるのは、勉強が好きな子供や、将来なりたい自分を描いている子供が、親の理解を得られずに希望する道に進めないケースだ。

日本で暮らす外国人に、言葉をはじめとする文化やしきたりなどを理解してもらうことは最低限必要だ。大人に対しては勤務先などの企業が責任を持ってサポートすることが効果的であろう。2019 年 4 月に創設された在留資格『特定技能』でも、外国人に対する日常生活上、職業生活上、社会生活上の支援は、受入れ機関が行うよう規定された。それらに加えて知ってもらいたいことは、日本は様々なチャンスがある自由な国だということだ。両親ともに派遣社員として工場に勤務している家庭も多く、親も子供達も自分がそれ以外の仕事につくイメージが湧かないようにも見受けられる。しかしこれからは、渡辺さんやダルモさんのように輝いている先輩を人生のモデルとして見ることもできる。学校では、子供たちが将来の夢を持てるように、それぞれの子供の個性に合わせて可能性を伸ばすべく指導をするだろう。それを肯定的に受け止められる家庭を多くしていくためのサポートも必要と考える。それを企業に担わせることは難しい。学校や地域が担わざるを得ない。

子供には学校をはじめとしていくつかのコミュニティがあるが、大人は地域との接点を持たずに職場との行き来だけをする場合も少なくない。そんな彼らでも、教会については当然に存在するものとして語り、日曜には礼拝に行く。礼拝の後は仲間とバーベキューなどを楽しむ。心の拠り所として、外国人同士のコミュニティとして、教会が有効に機能していることがうかがい知れる。美濃加茂市にブラジル人とフィリピン人が多く住む理由の一つに、様々な教会の存在が考えられる。教会と一口に言っても、ビルの中の一角にあり外観からは分からないものもある。地域との接点の少ない外国人とコミュニケーションをとるために、教会と連携することは一つの効果的な手段であろう。同じキリスト教徒ではあるが、ブラジル人とフィリピン人の交流は盛んではない。それぞれに活動している点に留意は必要だが、子供の幸せを思う気持ちに違いはない。何をもって幸せと思うかは個人の価値観によるが、子供の目の前にある様々なチャンスと将来の幸せについて、深く考える機会がより多くあればと思う。

渡辺さんやダルモさんのように、地域のサポートも得ながら自らの力で未来を切り拓いて活躍していく外国人の子供が増えることを期待したい。

今回は在留外国人の子供と親に焦点を当てたが、来日間もない外国人が仕事と住所を転々と変えるケースが増えていることを、行政書士である渡辺さんに教えてもらった。より待遇の良い仕事に移れるのであれば、転居することに躊躇がないようだ。仕事と住所が安定しなければ、企業も学校や地域も関わり方が難しくなる。新たな課題が浮き彫りになる可能性が出てきていることを申し添えておく。

次号では、外国人との共生に向けて活動する地域の人々などを紹介する。

【参考】教会について

ブラジル人もフィリピン人もキリスト教カトリックの信者が多いが、相対的にブラジル人の方が柔軟である。

カトリック教会では母国語でのミサが隔週でしか行われないため、毎週ミサに参加したいブラジル人がプロテスタント系の教会の礼拝に行く例も少なくない。プロテスタント系の教会は、街中のビルの中にある場合が多い。

カトリック美濃加茂教会

プロテスタント系の教会の例